

再考ソクラテス裁判

— 「天空の事象に関する探求」と不敬罪を巡る素描的試論 —

和 泉 ち え

1. 問題の所在

善良なる愛国者(ἀγαθὸς καὶ φιλόπολις)¹メレトスがソクラテスを告訴するに際して提出した宣誓口述書の内容、即ち「ソクラテスは犯罪人である。青年を腐敗させ、国家の認める神々を認めずに、別の新しいダイモーンの類を祭るがゆえに」という告訴理由²の主要論拠は、「ソクラテスは天空や地下のことを探求している」³というアテナイ市民一般の認識であった。しかし「天空や地下の事象に関する探求」が如何なる意味において不敬罪に該当

¹ Plato, *Apol.* 24b5. メレトスに対して付与された「善良な愛国者」(ἀγαθὸς καὶ φιλόπολις)という形容は、*Apol.* 24c5-8において次のように展開される。即ち「これまで少しも関心を持ったことのない事柄について、真面目に憂慮する素振りを示し、軽々しく人を裁判沙汰に巻き込んでいる」、そのような人物が「善良なる愛国者」なのである、と。アリストテレス『アテナイ人の国制』(34.3)によれば、メレトスが帰属するアニユトス一派は「父祖の国制を求めていた」と謂われる。「愛国者 φιλόπολις」という言葉に付随する当時のニュアンスに関しては、例えばアリストファネス『女の平和』の中の以下のコロスの台詞「見上げたものだ、その心根とその勇氣、優雅な心と愛国心、思慮ある者の徳」(545-547)、また同じくアリストファネス『福の神』に登場する告訴常習者の自己既定が「立派な愛国者」という表現に集約されること(900, 901)等からも看取されよう。またトゥキュディデス『戦史』において、ラケダイモン人にシケリア遠征を説くアルキビアデスの演説(前415年冬)は「愛国者 φιλόπολις」という概念を核に据える(Thucy. 6.92.2., 6.92.4)。

² Plato, *Apol.* 24b8-c1: 'Σωκράτη φησὶν ἄδικεῖν τοὺς τε νέους διαφθείροντα καὶ θεοὺς οὐδ' ἠ πόλις νομίζει οὐ νομίζοντα, ἕτερα δὲ δαιμόνια καινά.' Cf. DL 2.40., Xenophon, *Mem.* 1.1.1.

³ この表現は、アニユトス一派によるソクラテス告訴以前に、既にアテナイの人々に流布していたソクラテス像を既定する要素として『ソクラテスの弁明』の中で頻繁に言及される。Cf. 'τὰ τε μετέωρα φροντιστῆς καὶ τὰ ὑπὸ γῆς πάντα ἀνεζητηκῶς' (*Apol.* 18d7-8), 'ζητῶν τὰ τε ὑπὸ γῆς καὶ οὐράνια' (*Apol.* 19b5), 'τὰ μετέωρα καὶ τὰ ὑπὸ γῆς' (*Apol.* 23d5-6)。

するのか、その論拠は明瞭ではない。メレトスをはじめとする多数のアテナイ市民は時の権力が煽り立てる独善的愛国主義に踊らされ、無教養に起因する判断停止に流されながら不敬罪訴訟を乱発する多数派の潮流に喜々として便乗し、取り返しのつかない愚かな判決投票を重ねていた。⁴

天空や地下の事象に関する自然探求が不敬罪告訴理由として登場するのは、ソクラテス裁判より遡ること約40年、ペリクレス時代のアナクサゴラス裁判である。⁵ プルタルコスによれば、ディオペイテスなる人物が「神々の事を認めなかったり天空の現象に関する学説を教える者を罪に問う法案を提出し、アナクサゴラスを口実にペリクレスに猜疑を掛けさせようとした」という。⁶ しかし如何なる意味に於いて「天空の事象に関する探求」が不敬罪に該当するのか、その理由をプルタルコスは明示しない。むしろ彼が示唆するのはディオペイテス決議案の不当性であり、そこに揺曳するのはペリクレスを巡る陰湿な政争であった。しかしこのアナクサゴラス裁判が発端となり、以後「天空と地下の事象を探究する」知識人達が不敬罪の咎で告訴される事態が次々と生起する。⁷ その最終章に登場するのがソクラテス裁判であった。ソクラテス裁判は彼の哲学の独自性に由来するものではなく、むしろこれら一連の自然探究告訴を引き起こした潮流と密接に連動するといえよう。本稿は、その要因描出を念頭に置きつつ、ソクラテスが何故に不敬罪の刻印を押されなければならなかったのか、その原因を「天空の事象に関する探求」と不敬罪を巡る歴史的文脈の中で再考することを目的とする。

⁴ 不敬罪に関する古代の証言に関して以下の事例が挙げられよう。例えばアナクサゴラス (Plut. *Per.*32.2, etc.)、アポロニアのディオゲネス (Diod. Sic.12.39.2, etc.)、プロタゴラス (Sext. *Math.* 9.55-56)、ディアゴラス (Sext. *Math.* 9.51-55)、ヘルメス像毀損事件、アルキッポス訴訟、アンドキデス訴訟、等。特にディアゴラスに焦点をあてた不敬罪の潮流に関しては、Woodbury (1965)、Janko (2001)。

⁵ アナクサゴラス裁判およびその年代査定に関しては、Mansfeld (1980)参照。

⁶ Plutarch, *Pericles*, 32.2.1-32.3.1, 'ψήφισμα Διοπέιθης ἔγραψεν εἰσαγγέλλεσθαι τοὺς τὰ θεῖα μὴ νομίζοντας ἢ λόγους περὶ τῶν μεταρσιῶν διδάσκοντας, ἀπειροδόμενος εἰς Περικλέα δι' Ἀναξαγόρου τὴν ὑπόνοιαν'.

⁷ n.4 参照。

2. 「天空の事象に関する探求」とソクラテス

i) 一つのジレンマ

プラトン『ソクラテスの弁明』におけるソクラテスは、「天空の事象に関する探究」に関与しなかったと繰り返し主張する。即ち「自然探究に勤しむソクラテス」というアテナイ市民多数が抱く一般認識は、ソクラテスを標的に四半世紀余の長きに渡り撒き散らされた中傷と噂が醸成した不当な臆見であり、真実のソクラテスはこの種の探究に全く手を染めていないのだ、と。⁸ 同様の主張はクセノフォンにおいても明瞭に看取される — 「ソクラテスは万有の性質についても他の多くの人々のようにこれを論議することを欲せず、学者輩が扱う宇宙の性質を問うたり、個々の天界現象を支配する必然を尋ねたりすることなく、かえってこうした問題を詮索する人間の言語道断を指摘した」と。⁹ これら両者の弁明を受け入れるならば、アリストファネス『雲』に描かれたソクラテス像は事実無根のゴシップに基づく捏造である、と判断されなければならない。しかしその一方、プラトン対話篇が描出するソクラテスもまた、折りに触れては「天空の事象に関する探究」に関する深い関心と知識を披瀝しており、実際「魂の不死性」をはじめとするソクラテス的諸命題の論拠の根幹は、「天空の事象に関する探求」の成果に多くを負っていた。¹⁰ ここに於いて我々は、ソクラテスと「天空の事象に関する探求」を巡って一つのジレンマに直面する。即ちプラトン『ソクラテスの弁明』と他のプラトン対話篇が描出するソクラテス像は、「天空の事象に関する探究」への関与という観点において相反する相貌を呈するからである。

⁸ Plato, *Apol.* 18b6 'οὐδὲν ἀληθές', 19c4-5 'ὧν ἐγὼ οὐδὲν οὔτε μέγα οὔτε μικρὸν πέρι ἐπαίω'.

⁹ Xen. *Mem.* 1.1.11-12.

¹⁰ 例えば『パイドン』末尾で披瀝される天空および地下世界の構造、『パイドロス』で語られる天空の構造、『国家』第十卷のエルの物語、『ティマイオス』等。これらは単なるミュートスではなく、そこには「天空（および地下）の事象に関する探求」の当時の成果が反映されている。また『パイドン』（96a ff.）においてソクラテスは、「天空や大地の諸事象」等の自然探求への傾倒と失望を契機に「真の原因」としての「善」の探求に至ったことを語る。その意味において「善」の探求もまた自然探求の成果を踏まえるといえよう。

しかしこのジレンマは、ソクラテス裁判を誘発した要因即ち自然探求と不敬罪の関係について有力な手掛かりを我々に与えてくれるように思われる。その端緒を求めて、プラトン諸対話篇における「天空の事象に関する探求」とソクラテスの関係を巡る断章を概観することしよう。

ii) ソクラテス裁判とディオペイテス決議文

『ソクラテスの弁明』において「天空の事象に関する探求」は、ソクラテスの虚像を醸成した「何ひとつ真実ではない噂話」(18b6)の中に登場する。

しかし彼らは(アニユトス一派より)さらに恐ろしい人々だった。諸君よ、彼らは君たちの大多数を子供の頃から手なずけて、何一つ真実ではない噂話を私を非難し続けていた。その噂話とは以下の通り。即ち「ソクラテスという賢人がいるが、彼は天空の事象を考察し地下の万象を探求した人物であり、また彼は弱論を強弁にする人物なのだ」と。アテナイ人諸君、彼らは斯様な噂を撒き散らし、私を告発する恐ろしい人々なのだ。そして噂を耳にする人々は、この種の探求に従事する者は誰であれ神々を認知しない、と思うようになるだろう。(Plato, *Apol.* 18b4-c2)

ソクラテス裁判の弁明冒頭で唐突に紹介された上記の噂話は、四半世紀前に上演されたアリストファネス『雲』の中のソクラテス像が、既にそれ以前にアテナイに流布していたソクラテスを巡る噂話を踏襲することをも暗示する。噂話の出自はソクラテスに対して嫉妬と悪意を抱く一派に由来し、¹¹ 彼らの目的は多数のアテナイ人に「ソクラテスは神々を認知しない」¹² とい

¹¹ *Apol.* 18d3 ὄσοι δὲ φθόνῳ καὶ διαβολῇ χρώμενοι ὑμᾶς ἀνέπειθον'. 「アニユトス一派よりも恐ろしい」(18b3) と謂われるこのグループの中に、アリストファネス以外に具体的に誰が関与していたのか、『ソクラテスの弁明』は明示しない。アリストファネスと同様に「ソクラテス」を揶揄した喜劇作家には、カリアス、アメイプシアス、エウポリス、テレクレイデスらが名を連ねる。Cf. Guthrie (1971: 40ff).

¹² *Apol.* 24b9, 26c2 etc. 「神々を認知する」という言明の前五世紀アテナイにおける具体的内実およびその諸事例に関する論考として、Fahr(1969)参照。

う共通認識を植え付けることであった。何より狡猾なのは、噂話の内容に「ソクラテスは無神論者である」という文言が一言も含まれていないことである。しかし人々は噂話を無批判に信じ、ソクラテスに無神論者の刻印を押した。噂話の主要部分、即ち「天空の事象に関する探求」が無神論者の顕著な徴候として機能したからである。この論理の背景には、前430年代アテナイの民会に提出されたディオペイテスの決議文—「神々を認知しない者あるいは天空の事象に関する言説を教授する者を弾劾訴訟手続きで訴える」¹³—が深く関与しているように思われる。なぜなら「神々を認知しない」という精神的姿勢の徴候を「天空の事象を探求する」という具体的行為に求め明文化したのは、ディオペイテスの民会決議文の他には存在しないからである。しかし「天空の事象を探求する者」が何故に「神々を認知しない者」と見なされるのか、その理由を述べるディオペイテスの議論は現存しない。その議論を、むしろディオペイテスは敢えて避けたと思われる。彼の意図は「天空の事象を探求する者」一般を不敬罪の咎で弾劾訴訟することではなく、当時権勢を振るっていたペリクレスの失脚を目論んで、ペリクレスと親交の深かった自然哲学者アナクサゴラスを告発するための何らかの公然の理由を用意することにあつたと推察される。¹⁴ その意味で不敬罪訴訟は、非常に便利な方途であった。「不敬」という概念は政治的意図に応じて融通無碍に拡大し、告発理由を容易に提供するからである。

以上のように、「天空の事象に関する探求」に対するソクラテスの関与を示唆する長年の噂は、アナクサゴラスが無神論の咎で告発された前430年代以来の不敬罪訴訟の流れを汲むといえよう。ソクラテスが戦ったのは彼を直接告訴した粗野な政治家アニュトス一派というよりも、むしろペリクレスに対する敵意ゆえにアナクサゴラスを告訴したディオペイテス一派の、四半

¹³ デイオペイテスの決議文がいつ民会に提出されたのか諸説あるが、Connor (1963 : 118) あるいはGarland (1992 : 136ff) は前432年、Ostwald (1986 : 535ff) やMansfeld (1987 : 80ff.) は前437年頃と推定。決議文に関してはPlutarch, *Pericles*, 32.2.1-32.3.1参照。またディオペイテスの決議文の存在自体に関する懐疑的立場としてDover (1988 : 146-147)。

¹⁴ Plutarch, *Pericles*, 32.2.3-32.3.1 ‘ἀπειριδόμενος εἰς Περικλέα δι’ Ἀναξαγόρου τὴν ὑπόνοιαν’.

世紀以上も前の怨念の残滓であった。その痕跡は、『ソクラテスの弁明』が活写するメレトスとソクラテスの応酬からも看取されよう。

メレトス「... ソクラテス、あなたは全く神を認めていない。」

ソクラテス「いや、驚いたね、メレトスよ。何を意図して君はそう言うのかね。そうすると僕は、太陽や月が神だということを、他の人々のように認めていないというのかね。」

メレトス「ゼウスに誓って、そうなのだ。陪審員のみなさん、ソクラテスは太陽は石、月は土だと主張しているのです。」

ソクラテス「それはアナクサゴラスなのだよ、哀れなメレトス、君が訴えているつもりの人物は。そしてそれゆえ君は、ここにいる陪審員諸君を馬鹿にしているわけなのだ。つまり君は、陪審員諸君は文字が読めないので、クラゾメナイのアナクサゴラスの書物には、今君が語ったような議論がぎっしり詰まっていることを、知らないと思っているのだ。... まあとにかく、ゼウスの神にかけて聞くけれど、僕が神の存在を一つも認めてはいないと、君は思うのかね。」

メレトス「そうだと、ゼウスに誓って、君は全く神を認めてはいないのだ。」

ソクラテス「いや、メレトス、君の言うことは信用できないね。それに君自身だって、僕の見るところでは、神を信じてはいないのだ。つまりメレトスは、アテナイ人諸君よ、全く無法、不躰な男のようです。そして何のことはない、このような告訴を起こしたのも、無法と不躰と若気の至りだと思われます。....」(Plato, *Apol.* 26c8-27a1)

上記応酬が如実に示すようにアニユトス一派のメレトスは、ソクラテスをアナクサゴラスに重ね合わせ、30年前のアナクサゴラス裁判をソクラテス裁判の先例として利用することを試みる。アナクサゴラス告発を正当化したディオパイテス決議文の主旨がソクラテス裁判においても有効に機能すれ

ば、アナクサゴラスの場合と同様にソクラテスに対する不敬罪が容易に確定するからである。その意味においてソクラテス裁判はアナクサゴラス裁判の再来であり、メレトスの背後にはディオパイテスの影が、そしてソクラテスの背後にはアナクサゴラスの亡霊が寄り添うともいえよう。ソクラテスは、この絡繰りを十分承知していた。「神々を認知しない」論拠として天文学を持ち出すメレトスに対して、ソクラテスは間髪を入れず「君が告訴しているのは、アナクサゴラスなのだよ」と忠告する(26d6)。しかしメレトスは反論できず、ただひたすら「あなたは全く神を認知していない」と繰り返すだけであった(26c7)。しかもメレトスが言及する「天空の事象に関するソクラテスの学説」はアナクサゴラスの書物からの引用であり、嘗てディオパイテスがアナクサゴラスに対して吐いたであろう台詞を、メレトスはソクラテスの前で鸚鵡返しのように諷んでいた。この茶番ゆえに、ソクラテスがメレトスを「無法で不躰で若気の至り」(26e8-9)と完膚無きまでに叱責するのも当然である。メレトスは「天空の事象に関する探究」が何故に無神論の論拠となるのか、その理由を説明できない。

iii) 「ソクラテスの歌舞仲間 ὁ ἡμετέρου χόρος — 『テアイテス』における「天空の事象に関する探求」 —

不敬罪の咎で告発されたソクラテスがバシレウスに出頭する直前に展開した哲学的問答法として位置づけられる『テアイテス』の中で、「天空の事象に関する探求」は「真の哲学者」を「法廷の駆け引きが専門」である弁論家から区別する重要な徴として強調された。その対比は以下のように要約される。即ち弁論家達は「権力ある地位を目当てに徒党を組んで必死の活動を行い、集会や宴会を催す」(*Theaet.* 173d4-6)のだが、一方真の哲学者は斯かる世俗の榮達を軽蔑し、たとえ大衆から嘲笑されようとも「地面に幾何を研究し、あるいは天空の事象を探求し「天の上にも地の下にも及ぶ」領域を極めながら「個物のみならず万有全体の本性」に関する認識を得るという(*Theaet.* 173e)。彼らこそが「できるだけ神に似る生き方、即ち思慮ある正義と敬虔さを備える人間」として「哲学者」と呼ばれるに相応しい生き方を送るのに対し(*Theaet.* 175e8-176a1)、その対極に位置する弁論術に長けた

抜け目ない知識人達は「悪を連れ合いとしながら」(*Theaet.* 177a7) 愚かさ
と不正ゆえに盲目の生を送るのであった。そしてソクラテスの「歌舞仲間」
は紛れもなく前者、即ち「天空の事象に関する探求」に専心する哲学者達に
限定される (*Theaet.* 173b4)。

ソクラテスと「天空の事象に関する探求」の深い繋がりを示唆する『テア
イテトス』は、両者の間の越えがたい一線を強調する『ソクラテスの弁明』
とは対照的なソクラテス像を描出するといえよう。バシレウスに出頭する直
前の「ソクラテス」と法廷に立つ「ソクラテス」は、「天空の事象に関する
探求」との関係を探り相反する立場を表明しているのである。前述のジレン
マが、ここに確認される。

『テアイテトス』が描写する「真の哲学者」、即ち天文・幾何学に秀でなが
らも法廷弁論に疎く世俗的名誉を軽蔑する「ソクラテスの歌舞仲間」の描写
は、当時既にステレオタイプ化され揶揄の対象として喜劇作品等に登場する
哲学者像を踏襲すると解釈されるのが常である。しかしこの解釈には、再考
の余地があると思われる。なぜなら『テアイテトス』が描出する「真の哲学
者」の学問方法論そして世界観は、ステレオタイプ化された哲学者像に帰属
する一般的な思想として処理されるべき類のものではなく、そこには特異な
傾向が看取されるからである。具体的には、以下の観点が挙げられるだろう。

a) 「事実、ポリスに寄留し存在するのは彼の身体のみである ἀλλὰ τῷ ὄντι
τὸ σῶμα μόνον ἐν τῇ πόλει κεῖται αὐτοῦ καὶ ἐπιδημεῖ」(*Theaet.*, 173e2-3)
という身体観と「天空および地下の事象に関する探究」の結合。この身体観
はプラトン諸対話篇の底流を流れるモチーフでもあるが、¹⁵ それが「自由
に超然と思考(διάνοια)を天空および地下の事象に巡らす」動機として機
能する文脈は、特に『パイドン』や『パイドロス』の中で言及される「カタ
ルシスの秘儀」に何らかの接点を持つと思われる。例えば『パイドロス』に
は、以下の一節が登場する — 「... 正当にも、ひとり知を愛し求める哲人の
思考のみが翼をもつ。なぜならば、彼の思考は、力の限りを尽くして記憶を呼

¹⁵ *Phaedo.*, 64c ff., 80c-84, 115d-116a, *Rep.*, 484b ff.

び起こしつつ、常にかのもののところに一神がそこに身を置くことによって、神としての性格を持ちうるどころの、そのかのもののところに—自分を置くのであるから。人間はじつにこのように、想起のよすがとなる数々のものを正しく用いてこそ、常に完全なる秘儀にあずかることになり、かくてただそういう人のみが、言葉の本当の意味で完全な人間となる」(*Phaedr.* 249c4-d3)。¹⁶

想起説の華麗な変奏として位置づけられる箇所であるが¹⁷、ここで言及される「かのもののところ πρὸς γὰρ ἐκείνους」とは単なる比喩的表現とは言い難く、この文脈では「神々の行進」がのぼりつめる「天球の外側 τὰ ἔξω τοῦ οὐρανοῦ」(247c3)の領域即ち「真理の野 τὸ ἀληθείας πεδῖον」(248b6)を具体的に意味することは、強調されて然るべきだろう。そして死すべき者どもの中で「最も神に倣う者」即ち真の哲学者の魂のみが「馭者の頭を上げて天外の世界に超出させる ὑπερῆρεν εἰς τὸν ἔξω τόπον τὴν τοῦ ἠνιόχου κεφαλὴν」(248a2-3)ことが可能なのであった。この領域に辿り着くためには、まず第一に「天球の内側 ἐντὸς οὐρανοῦ」(248c2)の「数多の祝福された光景と行路 πολλαὶ μὲν οὖν καὶ μακάριαι θεαί τε καὶ διέξοδοι」(247a4)を神々の行進に参加しながら観照するという段階を踏まなければならない。この行程は、翼ある魂の飛翔物語の一コマを彩る寓話というよりも、さらに踏み込んで真の哲学者が辿る探求行程の具体的内容を示唆する、と本稿は提起したい。そこに具体的に関与するのが「天空の事象に関する探求」なのである。それはまた「想起のよすがとなる数々のもの τοῖς δὲ δὴ τοιοῦτοις ὑπομνήμασιν」(249c7)の一要素として位置づけられると考えられる。¹⁸

またこれに関連して、『パイドン』の以下の一節が言及されて然るべきだろう

¹⁶ *Phaedr.* 249c4-d3, ‘διὸ δὴ δικαίως μόνη πτεροῦται ἢ τοῦ φιλοσόφου διάνοια πρὸς γὰρ ἐκείνους αἰεὶ ἐστὶν μνήμη κατὰ δύναμιν, πρὸς οἷσπερ θεὸς ὢν θεῖός ἐστιν. τοῖς δὲ δὴ τοιοῦτοις ἀνήρ ὑπομνήμασιν ὀρθῶς χρώμενος, τελέους αἰεὶ τελετάς τελοῦμενος, τέλεος ὄντως μόνος γίγνεται· ἐξιστάμενος δὲ τῶν ἀνθρωπίνων σπουδασμάτων καὶ πρὸς τῷ θεῷ γιγνόμενος, νοουθετεῖται μὲν ὑπὸ τῶν πολλῶν ὡς παρακινῶν, ἐνθουσιάζων δὲ λέληθεν τοὺς πολλοὺς.’

¹⁷ Rowe (1986 : 180). *Meno*, 80d ff., *Phaedo*, 72e ff.

¹⁸ この点に関して別途論考が必要だが、ここでは例えば『国家』で言及される天文学の意義、即ち「天空を飾る模様は、そうした目に見えぬ実在を目指して学ぶための模型としてこそ、これを用いなければならない」(529d)等が関連箇所として挙げられよう。

う — 「カタルシスとは、古来の言葉に語られているように、魂を身体から能う限り分離すること、… 今においても来るべき時においても、魂が、いわば身体という縛めから解放たれて、ただそれ自身において住まいうるように慣れさせること」(Phaedo. 67c5-d2)¹⁹。ここで言及される「古来の言葉 πάλαι ἐν τῷ λόγῳ λέγεται」(Phaedo. 67c5-6)とは、オルフェウス教およびピュタゴラス学派の教説を指示すると解釈される。²⁰ その意味において、身体から魂を分離させ「天空の事象に関する探求」を遂行する「ソクラテスの歌舞仲間」の背後には、オルフェウスとピュタゴラスの輩を措定することが可能だろう。特にピュタゴラス学派との関連は、以下 b)の観点からも推察可能である。

b) 『テアイテトス』に登場する「ソクラテスの歌舞仲間」の探求方法、即ち「事物全ての本性を、個物および万有にわたって探求しながら αἰ πάσαν πάντη φύσιν ἐρευνωμένη τῶν ὄντων ἐκάστου ὅλου」(Theaet., 174a1)というモチーフに登場する「個物の本性」と「全体の本性」の連動と対比は、特にピュタゴラス学派アルキュタスの学問論と呼応するように思われる。アルキュタスの断片1には以下の一節が登場する — 「数学者たちは立派な判断を下したと私には思える。そして個々の事柄について、それがどのような性質のものであるかを彼らが正しく理解していることは何ら驚くべき事ではない。なぜなら、全体の本性に関わることについて立派に認識したのであるから、個々の事柄に関しても、それがどのような本性のものであるかを、立派に見極めることになるのも当然であった」(Archytas B1, 1.11-16)²¹。アルキュタスの

¹⁹ Phaedo. 67c5-d2, 'Κάθαρσις δὲ εἶναι ἄρα οὐ τοῦτο συμβαίνει, ὅπερ πάλαι ἐν τῷ λόγῳ λέγεται, τὸ χωρίζειν ὅτι μάλιστα ἀπὸ τοῦ σώματος τὴν ψυχὴν καὶ ἐθίσαι αὐτὴν καθ' αὐτὴν πανταχόθεν ἐκ τοῦ σώματος συναγείρεσθαι τε καὶ ἀθροίζεσθαι, καὶ οἰκεῖν κατὰ τὸ δυνατόν καὶ ἐν τῷ νῦν παρόντι καὶ ἐν τῷ ἔπειτα μόνῃ καθ' αὐτὴν, ἐκλυομένην ὥσπερ [ἐκ] δεσμῶν ἐκ τοῦ σώματος.'

²⁰ Bostock (1986 : 29), Guthrie (1993 : 160, 216ff.).

²¹ Archytas B1, 1.11-16, 'καλῶς μοι δοκοῦντι τοῖ περὶ τὰ μαθήματα διαγνώμεναι, καὶ οὐθὲν ἄτοπον ὀρθῶς αὐτούς, οἷά ἐντι, περὶ ἐκάστων φρονεῖν περὶ γὰρ τὰς τῶν ὄλων φύσιος καλῶς διαγνόντες ἐμελλον καὶ περὶ τῶν κατὰ μέρος, οἷά ἐντι, καλῶς ὀψεῖσθαι.'

断片1に登場する数学者達は、ピュタゴラス学派の伝統を汲む人々と思われる。²² 彼らが継承する学問方法論、即ち個物の本性と全体の本性を連動させながら万有に関する正当な認識を得るという方法論は、『テアイテトス』に登場する「ソクラテスの歌舞仲間」のそれと類似する。また実際アルキュタス断片1が第一に言及する学問は「星の速度とその出没に関する探求」即ち「天空の事象に関する探求」であった。

上記の議論に基づき、本稿は以下の事項を導出する。即ち「天空の事象に関する探求」は『テアイテトス』に登場する「ソクラテスの歌舞仲間」を特徴づける要件であり、その背後に連なるのはピュタゴラス学派の学問方法論である、と。そしてバシレウスに出頭する当日、ソクラテスは「天空の事象に関する探求」に対する関与を認めていた。

iv) 「天空の事象を見つめる者」と国家の舵取り人—『国家』より—

「天空の事象に関する探求」は『国家』においても高く評価され特別の意味を負う。その証左の一つとして、『国家』第六巻に登場する「船の喩え」を挙げることができるだろう。「船」は「国家」を意味し、船の支配権を巡る水夫（弁論家・政治家）と船主（大衆）の駆け引きが皮肉を込めて揶揄される一方「真の舵取り人」の姿が「天空の事象を見つめる者 μετεωροσκόπος」(Rep. 488e4)として提示されたのである。それによれば「真の舵取り人」の資格即ち「国家を支配するに足る資格」を身につけるためには「年や季節のこと、空や星々や風のこと、その他この技術に本来的な関わりのある全てのことを注意深く研究しなければならない ἀνάγκη αὐτῷ τὴν ἐπιμέλειαν ποιῆσθαι ἐνιαυτοῦ καὶ ὥρων καὶ οὐρανοῦ καὶ ἄστρον καὶ πνευμάτων καὶ πάντων τῶν τῇ τέχνῃ προσηκόντων」のであり (Rep. 488d5-7)、この営為は、大衆に対する狡知な迎合と弁論術を通して船主（大衆）に取り入る政治家の世俗的活動の対極に位置づけられた。『テアイテトス』で言及された「ソクラテスの歌舞仲間」—即ち「天空の事象の探求」に専心

²² Barker 1989, Bowen 1982, Huffman (2005 : 126ff.), Izumi 2000.

するが法廷での駆け引きには疎い真の哲学者達—の系譜に、『国家』が描出する「天空の事象を探究する真の舵取り人」が連なるといえよう。しかし両者の間には、「天空の事象に関する探究」の意味内容に関して大きな相違点がある。即ち『テアイテトス』の中では「世俗を逃れて生きる」哲学者の徴にすぎなかった「天空の事象に関する探求」が、『国家』においては積極的に政治家の資質を決定する教養要件として躍り出たのである。この変容は単なる比喩の次元を越えて、「天空の事象に関する探求」が政治の領域と深い関係を結んだことを示唆する。この点に関する更なる手掛かりは、国の守護者の教育即ち哲人王教育の必須科目の中に天文学が含まれることからも看取されよう (*Rep.* 529a ff)。

「天空の事象を探究する」者達が、何故に『国家』では国政従事最適任者として脚光を浴びるようになったのだろうか。何故に突然「天文学」が国政に従事する哲学者教育のための必須科目に参入したのだろうか。この問題を考察するためには、『国家』の対話設定年代および執筆年代双方に関する検討が有効であるように思われる。

対話設定年代に関しては諸説入り乱れ未だ決着がついていないが、その幅は前411年から前452年までと広い。²³ 本稿は、『国家』の時代設定の鍵となる「ベンディス祭」導入時期を重要視し、²⁴ 対話設定年代をペロポネソス戦争勃発前夜の前430年代に据える立場を継承したいと思う。この年代は、いみじくもディオペイテスの民会決議文と時期を同じくし、「天空の事象に関する探求」が何らかの意味において政治に関与し始めた当時の状況をおそらく大幅な脚色を加えながら『国家』が活写するとも推察できよう。

また執筆年代に関しては、諸家の見解はほぼ一致して前四世紀の前半即ちプラトンが第一回目のシケリア旅行からアテナイに帰還した後の20年間を想定している。プラトン中期作品に漂うシケリアの香り—ピュタゴラス学派に帰属すると見なされる学問体系とその思想への言及—の由来を、諸家

²³ Jowett (前456年説)、Hermann およびBurnett (前430年説)、A.E. Taylor (前421年説)、Boeckh (前411年説)。

²⁴ Planeaux (2000 : 182) は碑文資料に基づき、前429年の6月にベンディス祭がアテネに導入されたと推定。

は『第七書簡』に基づきながらプラトンの第一シケリア旅行に求めるからである。この問題に関して本稿は今回立ち入ることを控えるが、『国家』の対話設定年代および執筆年代のいずれにも「天空の事象に関する探求」を巡る当時の状況が関与することは確認されて然るべきであろう。

v) 「天空の事象に関する探求」とアテナイ史編纂—『ティマイオス』—

『国家』の続編として展開される『ティマイオス』においても、「天空の事象に関する探求」は格別の地位を付与されている。まず第一に、『ティマイオス』それ自体が当時の「天空の事象に関する探求」の最新成果を反映する書であり、その成果を通して「善」の秩序構造の基盤が宇宙論的規模で揺るぎなく構築されたこと。そして第二に、「天空の事象に関する探求」は魂の理性的部分の世話および矯正にとって最も有効な方法として称揚され、哲学の筆頭に位置づけられたこと。この二点が挙げられよう。

『ティマイオス』は『国家』の続編かつ『クリティアス』の前編として、理想国家成立に至る壮大なアテナイの歴史編纂の冒頭を飾る書であり、その意図は政治的であった。「天空の事象に関する探求」が政治の領域に関与し始めた『国家』の続編に『ティマイオス』が続くのも、それゆえ故無きことではない。しかも天文学に最も精通するティマイオス本人は「ロクリスの最も重要な官職・名誉ある地位に就いて、その職責を果たしてきた人物」(*Tim.* 20a)でもあり、ここにおいても天文学と政治の結合が看取される。

また、『ティマイオス』は天文学の政治性を示唆するのみではない。「天空の事象に関する探求」は人間の生き方を導く重要な学問として、哲学の筆頭を飾った。「天空の事象に関する探求」には「我々の内にある神的なるもの動き」即ち「頭の中の回転運動」を「万有の調和と回転運動に学んで矯正する」効用があり、「観察する側のもの（理性・思考の運動）」を「観察される側のもの（星々の回転運動）」に似せて「前者をその原初の姿に返し」、その模倣を通して神々から人間に与えられた「最もよき生を全うする」ための「唯一の方法」として称揚されたのである (*Tim.* 90c-d)。この思潮はピュタゴラス学派に由来すると指摘されており、²⁵ その変奏は『国家』および『法

²⁵ Taylor (1928 : 623 ff.).

律』そして『エピノミス』の主要部分にも現れる。²⁶

vi) 「天空の事象に関する探求」の新潮流—『国家』と『ティマイオス』—
天文学者と政治の関連を示唆する『国家』と『ティマイオス』において、「天空の事象に関する探求」それ自体の内容は新たな変容を呈していた。即ちそれは旧来の天文学の手法を踏襲せず、当時の最新の幾何学即ち立体幾何学の成果をふんだんに取り入れながら新しいスタイルの天文学として生まれ変わったのである。政治と結合したのは旧来の天文学ではなく、この新しい天文学であった。『ティマイオス』は立体幾何学の成果なしには成立せず、²⁷ そこでは旧来の天文学者は「罪はないけれども軽率で、天空のことには詳しくても根が単純なので、それらについての最も確実な証明は、目で見て得られるとのみ信じているような人々」(*Tim.*, 91e)として揶揄されている。また『国家』においても彼らは「仰向けに遊泳しながら学んだところで、魂は断じて上ではなく下を見ていることになる」(*Rep.*, 529c)と批判され、観測の集積を重視する旧来の天文学よりもさらに「何倍も大変な」(*Rep.*, 530c)方法即ち幾何学的手法を用いる新天文学が高らかに称揚されるのである。

天文学と政治の結合は、立体幾何学の実質的関与なしには不可能であった。そして奇妙なことに『国家』で言及される立体幾何学者達は、「世間から軽視され阻害され」(*Rep.*, 528c)ながらも「誇りが高くて国家の指導に服そうとしない」(*Rep.*, 528b)と描写されるのである。

謎多きこの記述の背後に何があるのか、更なる継続調査が必要である。

3. 展 望

以上本稿は駆け足で、「天空の事象に関する探求」とソクラテスの関係を巡る痕跡をプラトン諸対話篇の中に辿ってきた。導出された事項は以下である。

²⁶ *Rep.*, 529a ff., *Laws*, 897c ff., *Epinomis*, 986c ff., 992b ff.

²⁷ Izumi (2001).

i) 不敬罪の咎で法廷に立つソクラテスは『弁明』の中で「天空の事象に関する探求」との距離の隔たりを強調したが、プラトン諸対話篇に現れるソクラテスは、その弁明の信憑性を覆すに足るほどの両者の親密さを公然に晒す。

ii) 天文学者は「ソクラテスの歌舞仲間」であり、しかもある時期（おそらく前430年代）を境に彼らはソクラテスと共に政治の領域に介入し始める。

iii) その「彼ら」に含まれるのは、具体的には南イタリア・シケリア方面の哲学者即ちピュタゴラス学派の名のもとに了解される人々であった。

iv) 政治の領域に関与する天文学は、旧来の天文学の手法とは一線を画す立体幾何学の手法に基づく新天文学であり、その背後にもまたピュタゴラス学派が深く関与する。

むしろプラトン諸対話篇が描出するソクラテス像と史的ソクラテスを峻別するためには更なる膨大な作業が必要であり、その作業成立の成否はプラトン唯一の自叙伝ともいえる『第七書簡』の信憑性を巡る長きに渡る論争の行く末に左右される。本稿はあくまでも「天空の事象に関する探求」との関係においてプラトン諸対話篇のソクラテス像の現れを素描し、その変容の背後に垣間見られる当時の状況の断片を僅かでも掬い取ることを目的とした。

本稿の当初の問題に立ち戻りたい — 何故に「天空の事象に関する探究」が不敬罪告発の論拠として機能し得たのか。上記導出したように、この問題を解く手掛かりは前430年代アテネを巡る諸状況の中に潜むと本稿は推測する。「天空の事象に関する探求」を不敬罪の事由として明記したディオバイテス民会決議文が成立しアナクサゴラスが告発されたのも、また天文学をソクラテスが政治の領域に導入し始めたのも、そして天文学を介してアナクサゴラスと親交を深めたペリクレスがペロポネソス戦争へと突き進んでいったのも前430年代であった。世俗の関心事とは一線を画す「天空の事象に関する探求」が何故に政治的告発の標的になったのか。この探求と関係の深いピュタゴラス学派の当時の動向を多面的に追跡しなければならない。おそらくそこにはアテナイを取り巻く複雑な政治状況が絡んでおり、その織りな

す光景が単なる物語に終わるのか、それとも学的検証に耐えうる歴史断面として彫琢されるのか、その如何はひとえに研究者の手法に準拠する。²⁸

文献表

- Barker, A.D., *Greek Musical Writings*, vol.1, Cambridge UP, 1989.
- Boeckh, A., *Gesammelte Kleine Schriften*, Leipzig, 1874.
- Bostock, D., *Plato's Phaedo*, Oxford UP, 1986.
- Bowen, A.C., "The Foundations of Early Pythagorean Harmonic Science: Archytas, Fragment 1", *Ancient Philosophy* 2 (1982) 79-104.
- Burnett, J., *Greek Philosophy*, London, 1960.
- Connor W. R., "Two notes on Diopieithes the seer", *CPh* 58 (1963) 115-118.
- Dover, J., *The Greeks and their legacy*, 2 vols., New York, 1988.
- Fahr, W., *THEOUS NOMIZEIN: Zum Problem der Anfänge des Atheismus bei den Griechen*, Hildesheim and New York, 1969.
- Hermann, K.F., *Geschichte und System der Platonischen Philosophie*, New York, 1976. Reprint of the 1839 ed. published by C. F. Winter, Heidelberg.
- Huffman, C., *Archytas of Tarantum*, Cambridge UP, 2005.
- Garland, R., *Introducing New Gods*, Cornell UP, 1992.
- Guthrie, W.K.C., *Socrates*, Cambridge UP, 1971.
- Guthrie, W.K.C., *Orpheus and Greek Religion*, Princeton UP, 1993.
- 保坂高殿, 「アテナイにおける不敬罪訴訟の起源を巡って」千葉大学『人文研究』34 (2005) 54-81.
- Izumi, C., "Did Plato actually meet Archytas? -A Speculation about Plato's Encounter with Archytas" 『千葉大学人文研究』29 (2000) 1-34.
- Izumi, C., 「*Timaeus* 31b4-32c4 再考—宇宙の身体の事実上の不滅性のテーゼと立体幾何学」『西洋古典学研究』XLIX (2001) 26-38.
- Janko, R., "The Derveni Papyrus (Diagoras of Melos, APOPHYRGIZONTES LOGOI?): a new translation", *Classical Philology* 96 (2001) 1-32.
- Jowett, B., and Campbell, L., *Plato's Republic*, v. 3. Oxford UP, 1894.

²⁸ この課題に関する見取り図は折りをあらためて提示する。

- Mansfeld J., "The chronology of Anaxagoras' Athenian period and the date of his trial", I. *Mnemosyne* 32 (1979) 39-69.
- Mansfeld J., "The chronology of Anaxagoras' Athenian period and the date of his trial., II : The plot against Pericles and his associates" , *Mnemosyne* 33 (1980) 17-95.
- Ostwald, M., *From Popular Sovereignty to the Sovereignty of Law*, California UP, 1986.
- Planeaux, C., "The date of Bendis' entry into Attica", *CJ* 96 (2000) 165-192.
- Rowe, C.J., *Plato: Phaedrus*, Aris and Phillips, 1986.
- Taylor, A.E., *A Commentary on Plato's Timaeus*, Oxford UP 1928.
- Woodbury, L., "The Date and Atheism of Diagoras of Melos", *Phoenix* 19 (1965) 178-211.